

Mon Nara



Numéro261 Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会 MARS—AVRIL 2014 3—4月合併号

全員参加で、記念式典・講演会・祝賀パーティを盛り上げましょう！

いよいよ5月11日（日）の創立20周年記念式典が近づいてきました。14:00～16:30に、国指定重要文化財の奈良女子大学記念館にて行なわれる講演会は、入場無料で申し込み不要です。一般来聴も歓迎ですので、会員のみなさま、ご本人は勿論のこと、ご家族やお友達、さらには多方面のお知り合いの方にも声を掛けて（案内チラシをもう1枚同封しました）、定員300名の会場を一杯にしようではありませんか！

在京都フランス総領事のシャルランリ・プロソー氏、当協会新会長の三野博司氏、副会長のオリヴィエ・ジャメ氏の3人による講演内容は、いずれも日仏交流に関するもので、聴衆のみなさまの認識を深め、新たな視野を開くものとなるでしょう。総領事のお話を間近に聴けるのは、またとない機会でもあります。

《シャルランリ・プロソー氏の略歴》

1968年パリ生まれ。フランス国立東洋言語文化研究所（INALCO）にて日本語と国際関係学を学ぶ。給費留学生として立教大学法学部政治学科に在籍。1997年フランス外務省入省、在日フランス大使館で内政担当。2000年本省・国際連合局・政治部（アフリカ担当）、2003年ニューヨーク国際連合・フランス政府常駐代表部一等書記官、2006年マレーシアフランス大使館公使、2009年本省・東南アジア課長を歴任。2013年9月在京都フランス総領事就任。

そして講演の後には素晴らしい音楽をお楽しみください。会員の三木康子さんのピアノの演奏は折り紙つき、曲目は日仏文化交流にふさわしく、武満徹と三善晃、ドビュッシーとラヴェル、日仏の作曲家から厳選された珠玉の小品で構成されています。

※三木康子さんによる曲目紹介は7頁をご覧ください。

講演会に続いて17:00～19:00には、奈良女子大学文学部南棟1Fのラウンジに会場を移して、祝賀パーティーが行なわれます。こちらは有料（会員2500円、一般3000円）で参加申し込みが必要です。4月25日（金）が締め切りですが、まだの方はなるべく早く参加登録をお願いします（ファックスまたはメールで）。立食形式ですが、美味しいと評判の奈良女子大学の生協食堂特製のお料理をご賞味ください。パーティーのアトラクションでは、梨里香さん（中辻純子理事）のシャンソンがお楽しみ頂けます。梨里香さんは、先月CDアルバムを発売され、記念コンサートを華々しく開いたばかり。そのときバンド・マスターを務めた土井淳さんが、この度奈良日仏協会の記念行事のために、伴奏に来て頂けることになりました。お二人の奏でるシャンソンに、きっと感激されることでしょう。

※梨里香さんからのメッセージは7頁をご覧ください。

こんな素晴らしい企画を見逃すのは、本当にもったいない！

Vous aurez un grand regret si vous manquez cette belle commémoration !

▼Mon Nara ページ案内▲

- | | |
|---------------------------|-----------------------------|
| P. 2 名句の花束 | P. 6 ニュージーランドのフランス/Fr-アラカルト |
| P. 3 私と日本 /バスク紀行 | P. 7 会員主催講座訪問、オーナーシェフの仕事 |
| P. 4 モンペリエ短期留学ほか | P. 8 理事会報告、お知らせほか |
| P. 5 チュイルリー公園の思い出／シネクラブ記事 | |

天に向かって伸びていく谷間の百合

LE LYS DE CETTE VALLÉE où elle croissait pour le ciel
(バルザック『谷間の百合』(1836年))

ベルニー夫人との恋(1822-32年)の思い出から生まれた小説『Le lys dans la vallée 谷間の百合』は、1836年に発表されました。生涯にたくさんの小説を書き残したバルザックですが、そのなかでも、美しい自然のなかで育まれる至純の愛の物語であるこの作品は多くの読者を獲得しています。フェリックスが新たな恋人に向かって、自分の過去の恋を語るという一人称の語りも、読者の物語への没入を容易にしています。そのフェリックスの独りよがりで、ときには感傷過剰な語りも、最後に置かれたモルソフ夫人の手紙、さらにはとどめを刺すようなナタリーの手紙で相対化されて、作品としての均衡を保っています。

原題のValléeには「谷間」の意味もありますが、ここでは広やかな川の流域を意味します。とはいって、さすがに「流域の百合」とは訳せないので、「谷間の百合」で定着しています。バルザックの愛した豊穣なアンドル川(ロワール川の支流)の流域が舞台です。

孤独な青年フェリックスは、トゥールの町の舞踏会でたまたま出会った女性への恋慕にとらわれます。ふたたび会いたいと強い望みを抱いて、トゥーラーヌ地方の館という館をすべて探索しようと心に決めて歩きはじめるのです。アンドル川流域を見晴らすことのできる場所まで来て、甘美な驚きに打たれて、こう考えます。「女性のなかの花であるあの人があの世のどこかに住んでいるとしたら、ここに違いない」。そして、1本のくるみの木の下で足を休めて、恋する夫人に思いをはせるのです。「LE LYS DE CETTE VALLÉE où elle croissait pour le ciel, en la remplissant du parfum de ses vertus 天に向かって伸びてゆきながら、その美德の香気によってこの谷間を満たしている谷間の百合」

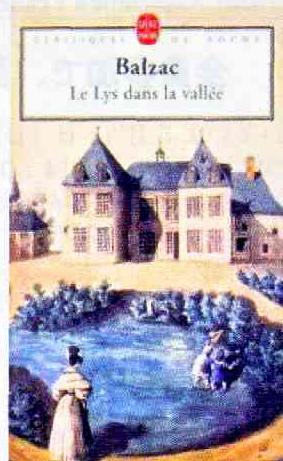
ついに出会った貞潔な人妻アンリエット・ド・モルソフ夫人は、横暴な夫と病弱な子どものそばで、苦悩多い生活を送っていました。しかし青年は熱烈に夫人を愛し、夫人のほうでも母親のような精神的な愛でこれに応えます。やがて、フェリックスはパリへ行き、グッドレー夫人と官能的な恋に落ちます。モルソフ夫人危篤の知らせを受けて、フェリックスは夫人と再会し、遺書として書かれた手紙を受け取ります。そこには、夫人の、貞淑であろうとして満たされなかった恋の恨みが記されていました。

バルザックの小説はいくつか映画化されています。リベット監督の『美しき静い女』(1992年)と『ランジェ公爵夫人』(2008年)を始めとして、『シャベル大佐の帰還』(1995年)『従妹ベット』(1998年)『ゴリオ爺さん』(2004年)などです。『谷間の百合』に関しては、1970年に制作された2時間のテレビ映画があります。インターネットでは、Ina.fr が有料(5ユーロ)で提供しています。原作を忠実にたどっただけの映画ですが、フェリックスとモルソフ夫人がボートで周遊するアンドル川、そして散歩する流域の風景が美しいです。

『谷間の百合』とそこに描かれたアンドル川を語るときに、忘れてならないのがサッシェの城館です。作家となつたバルザックは、ときおりパリを逃れて、故郷トゥーラーヌ地方に帰り、知り合いの貴族マルゴンヌが所有するサッ

シェの城館の一室を借りて執筆を行いました。ここで『谷間の百合』『ゴリオ爺さん』などが書かれました。現在はバルザック記念館になっています。車がないと簡単に行くことができませんが、1981年、当時トゥールに住んでいた友人が、アンドル川を遡行してサッシェの城館まで連れて行ってくれました。Youtubeでは、『Balzac au château de Saché』と題した4分半ほどの紹介映像を見ることができます。フランスの田舎の美しいシャトーの雰囲気がよく伝わってきます。案内役の女の子の笑顔がいいです。彼女のフランス語を聴くのも心地良いです。

→サッシェの城館(トゥーラーヌ地方※p.8に参考記事)



Q-3 (以下原文を掲載、スペースの都合で日本語は抄訳となります)

Vos impressions sur le Japon avant que vous veniez au Japon : ?

ジャメ先生が来日される以前に懐いておられた「日本についての思い」をお伺いいたしました存じます。

Jamet : Elles étaient déjà « prégnantes » et fortes en moi. Je m'intéressais depuis toujours aux langues et cultures étrangères. J'avais pu très tôt apprendre l'anglais et le russe (sans oublier le latin...). J'étais allé, dès 15 ans, en prenant le train pendant deux jours et en traversant toute l'Europe de l'Est, faire un stage linguistique à l'Université de Moscou, sur le « Mont des moineaux ». Mais je voulais aller toujours plus à l'Est, à la rencontre du soleil qui se lève (j'adore me lever très tôt...).

Un ami, voisin de palier* dans le même immeuble à Paris et camarade de lycée, lui, s'intéressait dès son enfance au Japon et admirait passionnément la collection de sabres de samurais qu'avait constituée son grand-père. Ce qui m'intéressait personnellement moi-même dans le Japon, ce n'était pas le côté guerrier, mais c'était le trésor humain, poétique et littéraire du Japon. Jamais, je n'aurais imaginé venir un jour vivre au Japon.

Mon impression beaucoup plus concrète du Japon date de l'année 1975 où j'ai eu la merveilleuse chance de pouvoir me rendre dans notre région du Kansai et de séjourner à Tenri où mon ami, voisin de palier*, à cette époque, enseignait à l'Université de Tenri et avait eu la très grande gentillesse de m'y inviter. Ce premier séjour au Japon, il y a 38 ans, éveilla en moi un très fort désir d'étudier la langue et la culture japonaises de la manière la plus approfondie possible. Ce qui me fut permis de manière académique quelques années après.

* palier =même étage (筆者注) (à suivre au prochain numéro)

❖【概略訳】私の心に既に芽生えて強まっていました。久しく前から外国語と外国文化に関心が深く、英・露語は早くから始めていました。15歳でふらり東欧中を廻る列車に乗ったことも。やがてモスクワ大学の言語学科に在籍したのですが、私の夢はさらに向こうの「東洋」「日出の処」へと馳せました。(朝の早起きが目標でした。) 私の住居と同じ階にいたリセの学友は祖父の感化で、幼少から日本に関心が深く、日本刀やサムライのグッズのコレクションに情熱を傾けていたのが縁で私も「日本のこと」に関心を持つようになりました。私個人は、日本の詩歌、文学などの精神文化に強く惹かれてゆきましたが、当時は、まさか日本で暮らす日が来るとは想像だにしませんでした。私の心象における「日本」は1975年から俄かに具象化してゆきます。奇跡的にも関西の天理に滞在する機会を得たのです。これも天理大学で教えていた例の隣人のお世話でした。38歳で初来日できた私は精力的に日本語と日本文化を心ゆくまで勉強、何年かのちには学術研究をする機会に恵まれたのです。(続)

バスク紀行(その2)

坂本 成彦 (顧問)

<サン・セバスティアン> 人口18万3千人 国境まで15キロ

陽射しきつゝ雲ひとつ無い晴天。戸外で朝は15°C、昼は24°Cの表示あり。ビスケー湾のゴンチャ海岸に面した高級保養地、宿泊するホテルもその一角にあり、海岸まで徒歩15分の場所。遅くまで明るいので海岸まで格好の散歩道。

ビスケー湾の海岸線をモンテ・ウルグルとモンテ・イゲルドが抱きかかえるような地形でモンテ・イゲルドの山頂から見ると青い空と海、白っぽい海岸に男女の甲羅干し、ボール遊びの人々、樹木の緑とレンガ色の赤い屋根・白い壁の建物が一望に見渡せ素晴らしい眺め。この地が19世紀の王妃マリア・クリスティーナはじめ多くの人に愛され、避暑地として発展した理由が納得できる。更に奥から右手前にかけて旧市街が延びる。

旧市街は戦争で殆ど焼けたそうですが、城壁を壊しながら拡大発展してきたとのこと。商業施設内のエスカレータ上り口そばに旧城壁の「塊」が遺跡として残しており、面白い発想は日本では考えられない。歴史を身近に残すことは大変良い事で見習ってもいいのでは?

2階建て石造り建物の旧市場の地下に新しい市場があり見学。商品の陳列するセンスがフランスは抜群にすぐれているが、魚屋の店には驚いた。魚が立ち上ったように並んでいて、しかも彩りよく配置されている。バスク地元料理「ピンチヨス」の店(写真)、男性専科の美食家俱楽部などグルメの街に感心する。

<ゲタリア> 人口7千人 郷土の英雄 = エルカノ

サン・セバスティアンから車で30分の小さな漁村、ゲタリアへ移動。昔は捕鯨基地で栄えた。度重なる大火や戦争で廢墟同然となるも、現在は、漁業、観光、ワイン(チャコリ)で活性化している。マゼランの死後、船の指揮をとり、世界一周を果たしたエルカノはここゲタリア出身で、スペインの英雄として知られている。街の中心には彼の大きな銅像が立っており、直ぐ近くにある英雄と同名「エルカノ」で昼食。美食の街中でも魚料理で超有名とのこと。広い店内は満席。メインは朝取れの鰈の塩焼き。活けの大きな鰈を見せて、店の前で塩焼き。数匹を皆で分け合ったが、腹いっぱい。頬肉、縁側ゼラチンなど説明して取り分けてくれ小生は満腹、もったいない。久しぶりの鰈の塩焼きと白ワイン・チャコリ2012年、赤ワイン・リオハ・クリアンザ2005年に堪能した。パンは皮がパリッとして中が柔らかく、デザートもおいしい。(以下次号へ)



モンペリエに短期留学

佐々木 幸代（会員）

2月に2週間、モンペリエに語学留学に行ってきました。モンペリエはパリから飛行機で1時間半の所に所在し、地中海に近くその温暖な気候、晴天続きの快適さは何とも言えません。ホームステイ先ではリラックスして過ごす事ができ、学校でも先生やクラスメイトに恵まれ、最高の環境でした。

初日に、ブラジル出身のアンドレザと友達になり、授業が終わって昼食に行こうとした時、ガイドのジェレミーに声をかけられ、急遽昼からモンペリエの街を案内してくれることになりました。アンドレザはモンペリエの大学で中国医学の勉強をしていて、旦那様はフランス人ですが、二人で話す時はスペイン語だそうです。

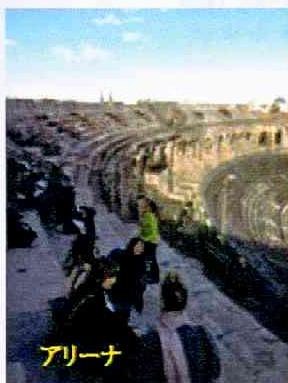
でも、彼女のフランス語力はかなりのレベルで、ジェレミーにも色々な質問をしていました。私は、大学でヨーロッパの歴史を学んだばかりだった事が幸いし、語学力を知識で補い理解することが出来ました。最後はカフェでワインのレクチャーを受けておひらきでしたが、初日から幸先良くニームの半日観光にもジェレミーが招待してくれる事になり、水曜は授業が終わった後、バスで他の留学生達とニームに行ってきました。ここで思ったのは、フランス語を学ぶということは、フランスの歴史、しいてはヨーロッパの歴史を学ぶ必要があるということでした。

ニームでは、闘牛が行われるアリーナも見学、中に入つて上から眺めることができ、感激もひとしおでした。ニームは紀元前600年頃ケルト人が居住したことに遡り、その後ローマの街の一つとして大変繁栄しました。その時代に建設されたのが、ローマ文化の色濃く残るアリーナやメゾン・カレです。アリーナは侵略の時代には人々が避難する場所となり、今では、闘牛の他、コンサート会場に使われたりしています。余談ですが、私達が普段履いているジーンズの生地、デニムはニーム発祥で、『セルジュ・ドゥ・ニーム serge de Nimes』(ニーム産のサージ生地)が語源です。

モンペリエ滞在中には、毎日、教会の鐘の音を聞かない日はありませんでした。思うのは、フランスに根付くキリスト教文化の深さです。帰りにパリで4泊した時も、サン・ジェルマン・デ・プレ教会近くに宿泊したせいか、ホテルの部屋まで鐘の音が聞こえてきて、その度にここはフランスなのだと改めて感じる瞬間でした。今でも、鐘の音とともに、モンペリエとパリの町並みが、頭の中で蘇ります。

最後の朝、ホストファミリーのイザベルと、プライベートな事も話す時間ができ、結婚しないで子供を産んだ大変さ、相手の男性は同じモンペリエに住んでいて、子供は父親に会っていること、でも彼女は決して会わないこと、などを聞きました。そして、イザベルは60歳を過ぎ、仕事はもう退職、週に2、3度は夜に「スイング」というダンスを習いに出かけていき、楽しみを持って生活をしているようでした。普段も夕方私が部屋に戻る頃、よくイザベルの友達が来て晩御飯の支度時間まで、おしゃべりして帰つて行くことが度々ありました。子供が独立して独りで暮らしていくても友達が沢山いて、私のような留学生を受け入れ、好きな習い事に出かけ、深い本音は分からなかつたけれども、自由人という感じで楽しそうにさっそうと生活している彼女をみると、人生は自分次第でどうにでもなるものだと感じずにはいられませんでした。

来年も短期留学を考えていますが、モンペリエにはもう一度行きたいと思う程、この街が気に入つてしましました。学校で最後の日にまたここに戻つてきたい？
と聞かれ、勿論私の答えはOui！でした。



アリーナ



アンドレザと ニーム フォンテ
ーヌ公園にて



《マルチーヌ・リード(Martine Reid) 氏 講演会のお知らせ》

——主催 奈良女子大学文学部仏文教室 後援 奈良日仏協会——

- ▶ 日 時 2014年5月20日(火)14:40-16:30
- ▶ 場 所 奈良女子大学総合研究棟(文学系S棟, 正門入りすぐ左手へ) S124 講義室

「男装の麗人」あるいは「ショパンの恋人」として知られる、19世紀フランスの女性作家ジョルジュ・サンドですが、この名 George Sand は筆名であり、彼女の本名(Amantine-Aurore-Lucie Dupin ; baronne Dudevant)ではありません。ところで、フランスではめずらしくない「ジョルジュ」という名前は、普通なら George ではなく、Georges と綴る男性名です。男装をし、男性名を元にした筆名を持つ一方、多くの男性の「恋人」や「愛人」として名をはせた文筆家サンドの、性別(masculin, féminin)の問題が本講演のメインテーマです。講演者のマルチーヌ・リード氏は、リール第3大学教授で、サンドおよびスタンダール研究者として多くの著書があります。

中でも『Signer Sand : L'œuvre et le nom』(Editions Belin, 2004)は、サンドの筆名から彼女の文学を読み解いたもので、今回の講演内容と大きく関わるもので、また、最近 Folio から、ジョルジュ・サンドの評伝も出版されています。ジョルジュ・サンドの男性性や女性性についてはもちろんのこと、同時代の女性作家の地位や状況についても、興味深いお話をうかがえることと思います。

問い合わせ先：奈良女子大学・高岡尚子 (E-mail : naotakaoka@cc.nara-wu.ac.jp)

***** チュイルリー公園の思い出 *****

泉 莊太 (会員)

はじめまして、今年度から奈良日仏協会に入会させていただきました。よろしくお願ひします。2012年の秋に家族でフランス旅行に出かけ、ベルサイユ宮殿やエッフェル塔、オルセー美術館、ポンピドゥー・センターなどを訪れました。特にポンピドゥーの膨大な映像アーカイブには驚かされました。

学生時代の授業を通じて、身近な自然や環境に関心を持ちました。以来、アートを通して地域でワークショップを行う里山の活動に興味を持っています(今も里山における保全活動は続いている)。そんなこともあって、フランスへの旅は様々な発見をもたらしてくれました。

さて、フランスの街を歩いていると、電線がなく日本のような広告もあまりありません。偶然チュイルリー公園に立ち寄ると、大勢の人が集まっています。そして池の周りの椅子に座つてくつろいだりしていました。おかしいなと思って池に視線を移すと、なんとそこには兵庫県三田市の「田んぼのアトリエ」で見た〈風の彫刻家〉新宮晋氏の彫刻があったのです。その姿はまるで鳥のようでした。ちょうどそのとき庭園では、コンテンポラリーアートの展示が催されていました。

最近もポンピドゥーセンター・コレクション展を見て、潜在意識にまでスッと入り込む作品の質の高さに感心しました。ポンピドゥー・センターには、今も昔もアートの歴史が詰まっていると思いました。フランスを気ままに旅することができ楽しかったです。



チュイルリー公園の新宮晋氏の彫刻

第33回 奈良日仏協会シネクラブ例会の案内

| | |
|-------|---|
| 日時 | 4月 26日 (土) 13:30~17:00 |
| 会場 | 奈良市西部公民館 5階第4講座室 |
| プログラム | 『シェルブルの雨傘』 (Les Parapluies de Cherbourg, 1964年, 90分) |
| 監督 | ジャック・ドゥミ |
| 参加費 | 会員 無料, 非会員 300円 |
| 懇親会 | 例会終了後「味楽座」にて |
| 問い合わせ | tel.0743-74-0371 Nasai206@gmail.com(浅井) |



2014年の日仏シネクラブのプログラムは、「フレンチ・ミュージカル」特集からスタートします。最初にお届けする『シェルブルの雨傘』はことで公開50年、今なお「メロドラマの傑作」「永遠の名作」「何度もあきない」と評され、多くの人から愛されている作品です。しかも、近年デジタルリマスター版が公開され、以前よりもいっそう色彩鮮やかな映像が、わたしたちの眼を驚かせ、楽しませてくれます。そして特筆すべきは何といっても音楽。すべての台詞が歌で表現されているために、若い恋人たちの切ない愛の言葉に、いつのまにか観客も共鳴して感情が高まります。

« Mon amour, je t'attendrai toute ma vie. » (いとしいあなた、一生待っているわ)

« Je ne penserai qu'à toi. » (君のことだけ思っているよ)

いつまでも変わらぬ愛を、未来形で誓い合ったジュヌヴィエーヴ(カトリーヌ・ドヌーヴ)とギー(ニー・カステルヌオーヴォ)でしたが、「戦争」と「社会階層の差」が立ちはだかります。1957年11月の雨降りの日に始まって、6年後の1963年の12月の雪降る聖夜の最終場面を迎えるまで、二人の状況の変化が、一幅の「絵巻物」のように美しい映像と歌を通じて、次々と語り進められます。「悲恋」へと至る途中の年月が記されることで、当時のフランス社会の状況が、間接的に想起されます。物語には、ナント、ニース、シェルブル、ロシュフォールなど港のある町を好んで作品の舞台にした監督ジャック・ドゥミの自伝的要素も、織り込まれているようです。当時20歳の新人女優だったカトリーヌ・ドヌーヴの初々しさも印象的です。6月29日(日)の第34回例会にて紹介予定のクリストフ・オノレ監督『愛のあしあと』(2011)で、大女優として存在感を放つドヌーヴの姿を目になると、さらなる「時間」の経過を感じられることでしょう。

昨年2013年の4月~8月、パリのシネマテークで、「ジャック・ドゥミの魔法の世界」(Le Monde enchanté de Jacques Demy)と題した大規模な展覧会が開催され、フランスのミュージカル映画に及ぼしたドゥミの偉大な功績があらためて評価されました。

4月26日(土)の例会では、監督の他の作品『ロラ』『ロシュフォールの恋人たち』の一部を、参考映像として紹介する予定です。観客の皆さんのがんばり、「記憶」の交錯に身をまかせながら、2014年の今現在、映画を通じて新たに感じられるこをお楽しみください。

ニュージーランドの「フランス」

この度、会長の三野先生からの勧めで、奈良日仏協会に入会させていただきました。どうぞよろしくお願ひいたします。

大学でフランス文学を専攻しようと決めたのは、1回生の終わりでした。当時の奈良女子大学文学部では、1回生で様々な授業をとり、2回生からコースに分かれることになっていました。元々心理学を勉強する予定で入学しましたが、実際に授業を受けてみると何か違う。ではどのコースにしようか、と考えたとき、私の頭に浮かんだのはフランス文学と日本文学でした。

さっそく三野先生の研究室へ相談に伺い「フランス語、そんなに出来ないし不安なんですが…」等々、様々な不安や疑問をお話ししたように思います。詳しい内容はもう忘れてしましましたが、はっきり覚えているのは、三野先生が「フランス文学はいいですよ」と本当に楽しそうに仰ったことです。研究室を出た後、日本文学の先生に相談に伺うことなくフランス文学を専攻することに決めました。卒論と修論では Jean Cocteauについて研究し、

アカロアで見つけた看板
「民衆を導く自由の……」
(おそらくニュージーランドの国鳥
キーウィバードと思われます)

大学院修了後、一旦企業に就職しました。2011年に母校へ戻り、国際交流センターで大学の国際交流事業や日本人学生の語学研修、留学生の日本語教育などを

第118回フランス・アラカルトのご案内

- ◆日時: 2014年5月22日(第4木曜) 15時から17時
 - ◆会費: 会員1000円、非会員1500円
 - ◆場所: "菜宴"(奈良市小西町19(近鉄奈良駅南すぐ)) TEL: 0742-26-0835

申込み先:メール:Nasai206@gmail.com 又は tel & fax:0743-74-0371(浅井)

ゲスト紹介：

★アンドレ・アンジェイ= グルシェフスキさん

パリ第8大学修士課程(建築・都市計画)終了。パリ東洋語大学日本語学科、京都大学工学部研修員、宇治防災研究所研修員、東京日仏会館研究員(都市論)を経て、現在は関西の大学と市民を対象としたクラスで、フランス語・フランス文化講座を担当。

★金谷幸三(かなたに・こうぞう)さん(写真右上)

1966年神戸生まれ、10歳からギターを始める。武満徹やシュトックハウゼンの現代音楽に傾倒し、高校卒業後、現代音楽を学びにフランスに留学。パリ国立高等音楽院ギター科中退。パリ国際音楽大学ギター科首席卒業。シャントレル国際ギターコンクール優勝。東京国際ギターコンクール3位(邦人最高位)。ほかコンクール受賞多数。フランス国営放送の現代音楽番組に出演するなど現代音楽のスペシャリストとして活動。近・現代作品のみならず古典音楽やバッハに対する表現解釈についても造詣が深くルネサンスからジャズ、ポップスに至る幅広いレパートリーを持つ。柔らかなテクニックによる洗練された表現力と音樂性は高い評価を獲得。2010年以来「ルネサンス・アルトギター」11弦に持ち替え、現在この楽器の可能性を追求。

担当して、現在に至ります。

実は原稿依頼のメールを頂いた時、私は学生の語学研修の引率でニュージーランドにいました。言うまでもなくイギリスと密接な関わりのある国ですが、ニュー

ジーランドにも「フランス」があることをご存じでしょうか？

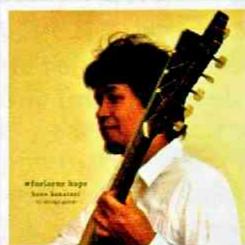
南島のバンクス半島に位置するアカロアという小さな町で、学生の研修先であるリンカーン大学から車で一時間程度の距離です。アカロアは、先住民族のマオリ語で「長い港」を意味するそうで、現在では野生のイルカを観察するツアーなどが人気の保養地です。1840年代にフランス人が捕鯨基地として開拓したため、町並みはフランスの面影を残し、フランス料理を出すレストランも数多くあります。町の通りには『Rue Lavaud』や『Rue Jolie』などフランス風の名前が付けられ、至る所でトリコロールやフランス語を目にするため、フランスの港町にいるような気分を味わうことができ、私の大好きな場所の一つです。ニュージーランドの小さなフランス、皆様も機会がありましたら是非訪れてみて下さい。



アカロア港の風景



アカロアで見つけた看板
「民衆を導く自由の……」
(おそらくニュージーランドの国鳥
キーウィバードと思われます)



本号第1頁記事から 《三木康子さんによるピアノ演奏曲の紹介》

- ・ 武満 徹作曲「雨の樹 素描Ⅱ」：メシアンに強い影響を受けた武満が、1992年オリヴィエ・メシアンの追憶のために作曲したものです。格調があり精神的な宇宙世界を創り上げています。
- ・ 三善 晃作曲「アン・ヴェール」：「韻文で」という意味です。緩一急一緩からなり、鋭いリズムや12音技法的な中にも、日本音階が随所に鏤められどこか懐かしさが感じられます。詩的な情緒漂う優しさがあり、三善 晃のピアノ曲の代表作となっています。アンリ・デュティユーにも学び多大な影響を受け、近代フランス音楽の影響を強く受けながらも、現代音楽を推進させました。
- ・ ラヴェル作曲「洋上の小舟」：「鏡」の第3曲です。大海原での波のうねり、その中で一艘の揺れる小舟の光景がラヴェルの心のなかで映されたものとして描かれています。
- ・ ドビュッシー作曲「前奏曲第Ⅰ集」より、可憐な美少女の肖像を美しいメロディーで描いた「亜麻色の髪の乙女」、ブルターニュ地方の海にのみ込まれた寺が時々海上に浮かびあがっては、また海底に沈んでしまうという伝説から着想された幻想的な「沈める寺」、「前奏曲第Ⅱ集」終曲より、パリ祭の夜空を輝かせる「花火」。最後は静かに遠くからフランス国歌「ラ・マルセイエーズ」が聞こえてきます。

《梨里香さんからのメッセージ》

奈良日仏協会創立20周年を迎えるにあたり、心よりお慶び申し上げます。その祝宴で歌わせて頂けますことは、とても嬉しく大変光栄に存じます。また、伴奏者の土井淳氏はキーボード奏者、アレンジャーとしても名高く、宇崎竜童さんや坂東玉三郎さんのコンサート、シネマ歌舞伎等の音楽を担当されている方です。20周年に相応しいシャンソンや日本の歌をフランス語でご披露致します。沢山のご来場、お待ち致しております。

会員主催講座訪問⑤

フランス語講座（水曜日 12:30～14:00）

当クラスは、ジャメ先生がお顔の半分に豊かな黒い鬚を蓄えておられた頃からの歴史ある講座です。当初からのメンバーに加えて、現在は7名が受講しています。先生はインターネットも利用されながら、フランスの芸術、歴史、地理、社会そしてフランス語の単語や文法など、受講生の興味に合わせて丁寧に説明して下さいます。クラスには、フランス語だけではなく多彩な才能に恵まれたメンバーが多く、穏やかで品のよい、そしてそれぞれの個性が輝く、生き生きとした雰囲気が漂っています。用意して頂

くレッスン後の薰り高いコーヒーと共に、お喋りも盛りあがります。そんな何気ない会話の中でも、私は相変わらず教えられることが多く、この方々とレッスンを受けられることを本当に幸せに思います。残念ながら親の介護や別れなど、またはお仕事の都合で休まざるを得ない方もありますが、又このクラスに戻ってきてたいとの言葉を信じて、新しく入られた方も一緒に皆で待っています。問い合わせ先は講座表をご覧になってください。

“オーナーシェフ”の仕事

北田 浩久（法人会員）

これまで料理人として18年、オーナーシェフとして1年半、過ごしてきましたが、オーナー（経営者）になってみて、仕事内容がかなり違うことがわかりました。日々の業務は数えきれません。かつては全ての業務を各部署で分担していたのが、ビストロ・ルノールのスタッフは僕とマダムの二人だけ。すべての仕事を二人で分担しています。オーナーシェフなんていう響きがいいですが、実際しんどい事は半端なく多くて、ほとんどが雑務です。仕入れに片づけ、掃除、銀行関係、メニュー立案、変更、書き換え、ブログに経理…など。実際にガス台の前で料理している時間は1日の20%位です。帰り際に「美味しいよ」「ありがとう」って言葉をかけてくださるお客様がいらっしゃると、それは本当に幸せな瞬間です。

「来てくださるお客様を裏切らないだけだな」と心して、毎日の仕事をひとつひとつ一所懸命にやっています。そしてこの小さな店をずっと維持していくようにしたいです。でないと、応援してくださるお客様はもちろん、家族を裏切ることになります。こういった努力は、きっとどのオーナーさんも皆当たり前にやっているのかもしれません。ただ、事業を継続させる工夫とアイディアが違うだけなのでしょう。

ビストロ・ルノールでは美味しいチーズはもちろん、市場で仕入れる新鮮な魚介類、地元奈良県産の牛肉や豚肉、契約農家さんの美味しい野菜達を使用し、フランスのビストロ料理を中心に基本に忠実でほっこり、やさしいお料理を提供しています。

それでは皆様、今日も Bon Appétit !



ビストロ・ルノール特製
「ニース風サラダ」salade niçoise

◆理事会の報告◆—事務局— 今年度第1回理事会の概要をお知らせします。

日 時:2014年3月17日(月)14:00~17:30、場所:菜宴(奈良市小西町)

出席者:三野、ジャメ、野島、濱、浅井、井田、仲井、中浦、中辻、南城、樋口、藤村 各理事及び
三木(監事、オブザーバー)

議題(1)総会・懇親会を振り返る:来年からは収支報告を全会員に広報する。

議題(2)当面の行事・活動計画:1)創立20周年記念式典・講演会及び祝賀パーティについて、具体案が練られた。

特に案内チラシについて意見を交わし結論を得た。(内容は、同封チラシと本誌の巻頭記事に)2)新企画のフランス・アラカルトを3/20“なららカフェ”で開催する。テーマはフランスの地方のお菓子。5/22にはゲストのお話を聞き懇談する形式で開催。

議題(3)会員情報の管理体制:1)会員情報管理の責任者を事務局長とし、役員は会員名簿の電子データを利用できる。2)入会申込書の様式を整理・統一する。3)会員名簿を更新する。

議題(4)ホームページの管理・更新体制:基本方針、掲載手続の簡略化、掲載時期の原則など申し合わせ事項が確認された。久保田会員をHP管理者として、その任務を委嘱することとした。

議題(5)Mon Nara:会員外の送付先の見直し。次号予定及び20周年記念特別号等について状況報告があつた。

«トゥーレーヌ»(旧)州
(Touraine) (※P.2の参考)

Touraineはフランスの旧州で都はトゥール。1790年に再編され、アンドル＝エ＝ロワール県、ロワール＝エ＝シェール県、アンドル県とに分割された。これら3州は現在サントル(Centre)地域圏に属する。パリ(Austerlitz)からTGVに乗って1時間ちょっとのところに、トゥールという街があり、ロワール河の小パリとも言われる由緒あるこの街には、当時の面影が残る旧市街をはじめ、いくつかの歴史的建造物が残っている。また流域には王朝時代の貴族の城が数多く残り多くは世界遺産に指定されている。主な城に、プロワ、シャンボール、アンボワーズ、シュノンソーなどがある。
(編集部)

編集後記 <鼻母音が結ぶ関西弁とフランス語>

今年の冬は奈良でも例外的に何度か積雪を見ました。それにつけても思い出されるのは、童謡の「雪やコンコ、あられやコンコ」の部分の不思議です。筆者は“よはい”還暦に至るまで「コンコン」と思っていたのです。ところが、いつかのNHKの番組でそうでないことを知ったのです。でも今も完全に納得したわけではありません。何故かといいますと、実際に歌ってみると、二番目の「コ」はやはり微妙に鼻母音化しているように思えるのです。無論個人差があるでしょうが、[kon ko]ではなくて[kon koN]ないしは[kon kō]ふうに歌ってしまいます。(Nは舌先を歯に当たらないn音)

今住んでいる奈良地方では「ん」の音を省略したり、軽く鼻にかけて発音することが古来おこなわれてきました。定説によれば奈良時代、当時の中央である大和では单母音は基本的に鼻母音でした。(これは中世まで続きます。)「坊や」を「ボン」、「五合」を「ゴンゴー」と発音するのもその名残でしょう。しかも、うれしいことに奈良や他の関西各地ではフランス語と同様にアクセントが大抵「尻上がり型」なのです。東京アクセントでは圧倒的に「頭高型」が多いようですが。これも関西弁とフランス語の類似が、他人の空似であっても親近感を感じさせる点なのです。折から今年は当協会創立20周年、奈良にとって記念すべき年であります。さて、時移り、星替わってこの古代の「鼻母音」は、いま日本のいづこに?…… 実は、東北地方あたりを彷徨っているそうです。「窓」=「マンド」、「羊」=「f i ~tsu ~zü」(Nakaura)

会員名簿・マーリングリスト更新(ご協力お願いします!)

次号 Mon Nara(5-6)に同封して新しい会員名簿をお送りする予定です。記載事項に変更のある方は、4月末までにFAX(0742-62-1741)ないしEメール(afjn_info@kcn.jp)にて、変更内容をお届けください。同時に会員マーリングリスト(以下ML、連絡用の一斉送信リスト)も最新の状態に修正いたします。会員名簿に掲載されるEメールアドレスはそのままMLに登録されますが、名簿への掲載をせずにMLに登録することも可能です。その場合は「MLにのみ登録」と明記しEメールでアドレスをご連絡ください。(事務局)

◆当協会では会員(特に法人会員)を募集しております。会員法人、お店の情報を掲載いたします。

◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、ホットなフランス情報などを歓迎します。

締切日:次号は5月末日が原稿締切日です。

Mon Nara mars—avril 2014 3—4月合併号 Numéro261

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : afjn_info@kcn.jp FAX 0742-62-1741

〒630-8691 奈良中央郵便局 郵便私書箱第30号[郵便物のみ] ©発行責任者:三野博司